

---

[書評]

*The Last Trek—A New Beginning*  
*The Autobiography*

by F. W. de Klerk  
(London, Panbooks, 1999, 412p)

林 晃史\*

---

I

1994年4月、南アフリカ共和国（以下、南ア共和国）では南ア史上初めての全人種参加選挙が実施され、その結果、N・マンデラを首班とする連立政権が成立した。これによって長年続いた同国のアパルトヘイト体制は崩壊し、民主南ア共和国が誕生した。本書は、アパルトヘイト体制最末期の政権党国民党の党首であり、大統領であったデクラークの自伝である。日本の読者層は、このアパルトヘイト体制の崩壊過程を、主に反アパルトヘイト運動側、具体的には日本語にも翻訳されたN・マンデラの自伝<sup>(1)</sup>等を通して理解しているため、当時の国民党がいかに従来の政策を変え、反アパルトヘイト運動側との交渉を通じてアパルトヘイトを廃絶していったか、また交渉の時点時点で何を主張し何を妥協したのかを知るのには難しい。評者はかつてこの過程を南ア新聞 *The Rand Daily Mail* 紙と *The Business Day* 紙を追うことによって理解しようとした<sup>(2)</sup> が、当事者の真意を把握するには限界があることを感じていた。現在、その一方の当事者であり当時の政権党の責任者の自伝が公表されたことによって、その限界の一部が氷解したように思う。勿論、自伝にありがちな自己正当化は本書でも当然考え

---

\* はやし・こうじ：敬愛大学国際学部教授 南部アフリカ政治経済論  
Professor of African Studies, Faculty of International Studies, Keiai University;  
political economy of Southern Africa.

られるが、幸い反アパルトヘイト運動側の資料とつき合わせることによってその真相の一端は明らかになると思われる。まず本書の構成は以下の通りである。

1. 家系
2. 少年時代
3. 教育
4. 法律、社会、政治
5. 議会
6. フォルスター内閣
7. 閣僚歴
8. 国民党内の分裂
9. 人種別三院制議会
10. 南ア黒人の憲法上の将来
11. 全面的攻撃 (Total Onslaught)
12. 国民党指導者としての選挙
13. ボータ大統領の政界引退
14. 大統領就任後の数ヶ月
15. 1990年2月2日
16. 交渉開始
17. プレトリア議定書と新国民党の誕生
18. 暴力とブラ作戦
19. 和平協定と委員会
20. 第1回民主南アフリカ会議
21. 南ア統治と国民投票
22. 第2回民主南アフリカ会議と大衆行動
23. 相互理解協定
24. スタイン調査
25. 多党交渉フォーラム、原子爆弾、暗殺
26. 暫定憲法への道
27. ノーベル平和賞
28. ズールーの分離独立要求
29. 自由連合 (FA) の挫折
30. インカタ自由党 (IFP) の選挙参加
31. 選挙と国民党支配の終焉
32. 国民統合政府 (GNU)
33. 新憲法、GNUからの離脱、野党、引退
34. 真実和解委員会
35. 後知恵の利点

以下、マンデラの自伝 (『自由への長い道』、以下、邦訳と記) を参照しながら全体を簡単に要約しておこう。

## II

名前から明らかなようにデクラークの祖先はオランダ出身であり、17世紀にケープタウンに移住した名門である。1954年、ポッチェムストルム大学入学、法律を学ぶ傍ら、国民党青年同盟の支部活動にも積極的に参加した。当時、南ア首相であり親英的なストレイダムが叔父にあたるという影響もあった。卒業後、弁護士となったが、72年、フェレーニッヒング補欠選挙で当選し政界入りした。その後フォルスター内閣の下で、郵政相、厚生相等を歴任し、情報省スキャンダル事件でフォルスター首相が失脚した後成立したボータ内閣でも閣僚としてとどまった。ボータ首相は国際社会のアパルトヘイト非難をかわすため、アフリカ人の分離発展政策はその

ままた、カラードとインド人の参政権を復活させる人種別三院制議会の導入を図った。これを契機に国民党内はボータ首相らの開明派（verligtes）とアパルトヘイト体制の維持・強化を図るトロールニヒトラの偏狭派（verkramptes）に分裂し、82年、後者は国民党から分裂して保守党を結成した。このとき、デクラークはどちらにも組せず中立を守った（p. 81）。さらに、人種別三院制議会でのカラード、インド人議員との交流を通じてデクラークは相互理解とアパルトヘイト法廃絶以外に解決は無いという確信を得た（p. 97）。85年のボータ首相のルビコン演説は右翼の圧力で失敗したが、当時、デクラークは反アパルトヘイト組織であるアフリカ民族会議（ANC）が武力闘争を続ける限りANCとの交渉の余地はないと考えていた（p. 106）。しかし、開明派のC・ユニス憲法開発相と協力して、ボータ首相にマンデラの釈放と交渉を要求し、交渉の際の原則として、(1) 統一南アフリカ、(2) 一人一票制、(3) 全アパルトヘイト法の廃止、(4) 少数白人の保護、を明らかにした（p. 109）。人種別三院制議会の導入は反アパルトヘイト運動の高揚を引き起こし、統一民主戦線（UDF）に結集して、タウンシップを拠点に激しい反アパルトヘイト闘争を展開した。これに対し、ボータ大統領は軍・警察を中核とする国家安全保障会議を創り全面攻撃の姿勢を明らかにし、85年、部分的非常事態宣言を発令し弾圧した。デクラークは、この全面攻撃が南ア共和国を破滅に導きかねないという懸念がその後の交渉を決意した不可欠の前提であったとしている（p. 121）。

1989年1月、ボータ大統領は軽い脳卒中で倒れ入院した。直ちにC・ユニスが大統領代理に任命されたが、ボータは国民党党首の座は保持した。同年9月に総選挙を控えた国民党はボータに無断で党長老4名で選挙を実施し、当時下院議長であったデクラークが3回の決選投票の結果党首に選ばれた。このことは退院して大統領復帰を目指すボータと国民党との対決を決定的にし、ボータは政界からの引退を余儀なくされた。そして9月選挙で勝利した国民党はデクラークを正式に大統領に選出し、以後、黒人との交渉による解決という彼の主張を推し進めていくことになる。

デクラークはまず国家安全保障会議を廃止、内閣制度を正常化した。つ

いで12月、入獄中のマンデラを大統領官邸に呼び、初めて会談した。彼の第一印象は、「マンデラは威厳があり、礼儀をわきまえ、自信にあふれていた」(p.157)というのに対し、マンデラは「最初の瞬間から、私はデクラーク氏が私の言い分に耳を傾けていることに気がついた。今までにない経験だった」(邦訳下巻、p.345)としている。

1990年2月の国会開会演説でデクラーク大統領は、アフリカ人との交渉を最優先課題とし、そのために、(1) ANC、パンアフリカニスト会議(PAC)、南ア共産党の合法化、(2) UDFなど33の反政府組織の活動禁止の解除、(3) できるだけ早期にマンデラを無条件で釈放すること、を明らかにし、2月11日、マンデラを27年ぶりに釈放した。かくして交渉が開始された。デクラークは交渉を以下の3段階に分けている。第一段階、大統領就任以前と直後の主にロンドンでの非公式交渉、第二段階、90年2月から91年12月の第1回民主南アフリカ会議まで、第三段階、それ以降、93年12月の暫定憲法採択まで(pp.173-175)。まず、ANCとの2回の予備交渉(90年5月と同年8月)で今後の平等な立場での交渉の条件が合意された。特に第2回予備交渉でのANC側の武力闘争放棄(プレトリア議定書)はその後の交渉を「不可逆」(p.189)なものとした。同時にデクラークは国民党自身も変革しなければならないと決意した(p.191)。

ついで本交渉の準備が始まったが、同時にこの時期、黒人間の衝突(殺し合い)が激化していた。それは権力奪取を狙うIFPとANCの闘争でナタール州が中心であった(pp.194-195)。大統領は直ちにゴールドストーン委員会を任命し、その調査と対応策に当たらせた。同時に秘密警察によりANCの一部が武力で政府転覆を図るブラ作戦を画策していることを知り、大統領は直ちにマンデラと会談し、その真相を糺し作戦を放棄させた。一方マンデラは黒人間の衝突を取り締まるのは政府の責任であるとし、7項目からなる最後通牒を大統領に提示したが、政府側が回答を拒否したためANCは本交渉への参加を拒否した。この事態を打開したのが、教会、財界主導による国民和平会議開催(91年9月)で、ANC、IFPも参加し、「国民和平協定」が調印された。

これによって本交渉への道が開かれ、様々な準備の後、第1回民主南アフリカ会議（CODESA I）が1991年12月、ヨハネスブルグの世界貿易センターで開かれた。18政党・組織が参加し、「統一した民主的で人種差別のない南アフリカ」の建設を謳った趣旨宣言が合意され、同時に制憲議会のための5つの作業委員会が設置された。このCODESA Iをデクラークは「（マンデラ氏の悪意のある非難に拘らず）大成功であった」（p. 225）と評価したのに対し、マンデラは初日の最終演説でデクラークが「ANCは和平協定に違反している」と非難したのに対し、激しく反論した（邦訳下巻、pp. 406-408）。

1992年5月、第2回CODESAが開かれたが制憲議会での憲法承認時の最低得票率の相違、地方分権問題、上院の拒否権などで合意が成立せず不成功に終わった。ついで6月、ボイパトン虐殺事件が起り、ANCは交渉打ち切りを宣言し、ANC支持層は大規模な抗議行動を展開した。政府はANCの交渉復帰を求めて交渉し、9月合意が成立した。しかし、この合意項目の一部に反対したIFPが逆にCODESAから離脱し、保守党等と共に憂国南アフリカグループ（COSAG）を結成した。COSAGはCODESAの白紙還元、伝統的首長層の参加を要求し、政府、ANCはその要求をいれて翌93年4月、第1回多党交渉フォーラムを開催し、同会議には伝統的首長層代表を含む26政党・組織が参加した。この直後のC・ハニ南ア共産党書記長の白人右翼による暗殺（この死に対し、マンデラはクリスの死で交渉を滞らせてはいけないと呼びかけた〔邦訳下巻、p. 422〕）、6月の白人右翼のフォーラム開催会場への乱入事件があったが、7月に第2回フォーラムは開催された。同会議後、地方分権を主張するIFP、アフリカーナー国家建設を目指す保守党がフォーラムから脱退し、自由同盟（FA）を結成した。政府、ANCはFAのフォーラム復帰を要請すると共に、暫定政府樹立、暫定憲法策定の交渉を続け、93年12月、暫定執行評議会が発足、暫定憲法に合意、同憲法に基づき翌94年4月、制憲議会選挙が実施された。同選挙に反対していたIFPは最終段階で態度を変え参加、保守党は不参加であった。同選挙の結果、ANCが最大得票率を獲得した。

1994年5月に発足したマンデラ新政権はANC、NP、IFPの連立政権でT・ムベキ（ANC）が第1副大統領に、デクラークは第2副大統領に就任した。新政権は民族和解を標榜し、経済政策としては成長と配分を重視する復興開発計画（RDP）を実施し、国際社会に復帰した。同時に新憲法策定のための制憲議会を発足させ、2年後の96年6月新憲法を採択した。しかし新憲法では連立政権の存続を否定したためNPは連立政権から離脱し野党となり、これを契機にデクラークはNP党首の座を退き政界から引退した。

### III

以上、本書の概要を簡単に紹介したが、初めに予想したとおり、これまで不明だった幾つかの点が明らかになった。まず、本書で著者が最も力を入れて書いている個所はボータ政権からの政権奪取の経緯である。大統領職と党首を分離したのはボータの政権復帰への布石とされているが、この異常事態をNP党内で党員の意見をまとめながらいかに対処したかが克明に記述されている。ただ依然不明なのは最長老のユニスが簡単に権力をデクラークに移譲してしまったこと、当時の国際状況を考えるとPik、ボータ外相にも十分次期大統領候補の機会があったと思われる。権力への執着度の相違だろうか。第2に政府・ANC主導による交渉過程とその後の新政権におけるマンデラとの関係である。交渉過程では、デクラークはマンデラに対し終始好意的立場をとったように表現しているが、新政権樹立後は副大統領執務室の問題や住居立ち退き問題でマンデラを批判するようになる（pp. 338-339）。一方、マンデラは様々な面でデクラークを批判しながら、次のように言う「批判を取り下げるつもりはないが、デクラークが平和への歩みに欠かせない純粋な貢献をしたことは認めていた。氏を失墜させようと思ったことは一度もない」（邦訳下巻、p. 427）と率直にデクラークとの関係を明らかにしている。二つの自伝を読み比べるとマンデラは率直に内面を吐露しているのに対し、デクラークは周囲にかなり気を使い慎重な表現をとっているように思われる。例えばCODESA Iの最終演説で

デクラークは「マンデラの悪意のある非難に拘らず」とだけ触れているが、マンデラはそれを引き起こしたデクラークの演説の内容を書き、反論せざるを得ない状況を明らかにしている。第3に、交渉に関するデクラークの時期区分で第1期の1990年2月以前の非公式交渉については本書ではまったく触れられていない。また、第2期と第3期の分水嶺をCODESA Iに置いており、最初の本交渉であり、以後、名称は多党交渉フォーラムに変わったが、その交渉はCODESA Iで採択された趣旨宣言と5作業部会の報告に基づいて行われたという点で首肯し得る。一方、マンデラはCODESA Iを高く評価しながらも、その前の2回にわたる予備交渉——対立していた白人との初めての交渉——を重視している。この時点でマンデラは「(デクラークは) 私の釈放を迎えた解放闘争側の高揚状態が収まるのを待っていた……。白人少数派の拒否権を確保することを狙っていた」(邦訳下巻、p. 381) とその後の交渉の推移を予見している。第4に、黒人間武力闘争における政府とIFPとの結びつきである。マンデラはしばしばそれを指摘しているが、デクラークはゴールドストーン委員会(後ハームズ委員会)の調査報告に基づき一貫して否定している(p. 204)。第5に国民党の連立政権からの離脱とデクラークのNP党首辞任であるが、連立政権の否定を規定した新憲法採択に国民党は賛成票を投じている。にも拘らず連立政権から離脱した理由として、デクラークはANCに対抗できる野党の存在の必要性を主張し、また、党首辞任に関しては、アパルトヘイト期の国民党のイメージを払拭するため、若い世代のM・ファン・スコルベイクに譲ったとしている。

以上、若干のコメントをしてきたが、本書は南ア共和国の民主化過程を研究する際、マンデラの自伝と共に不可欠な資料となろう。ただ、両書とも当然自己正当化を含むものと考え、両書をつき合わせ読むことが必要であろう。

(注)

(1) ネルソン・マンデラ(東江一紀訳)『自由への長い道』上下、NHK出版、1996年。

- (2) 林晃史「南アフリカ共和国の民主化——「対話」から第1回民主南アフリカ会議まで」  
『アジア経済』1992年8月。